

平成27年度特別展

幕末維新期の加賀藩



金沢市立玉川図書館 近世史料館

はじめに

幕末維新期は、長く続いた徳川支配体制が崩壊して新しい国家体制が志向される過渡期といえます。度重なる外国船の渡来は海防への関心を否応なく高め、幕府をはじめ全国諸藩は軍事力の強化に努めています。一方、嘉永六年（一八五三）のペリー来航以降、天皇の権威が著しく上昇するとともに国内も大きく揺れ動き、桜田門外の変や禁門の変、長州征討など大きな事件が発生し、慶応三年（一八六七）の大政奉還、王政復古を経て徳川の体制は終わりを告げます。

そして、慶応四年正月に旧幕府方と薩摩・長州が激突した鳥羽・伏見の戦いを発端とする一年以上に及ぶ戊辰戦争によって新政府は国内を掌握していきませんが、五箇条の御誓文、政体書の公布から版籍奉還、廃藩置県に至る過程は、まさしく新政府が中央集権体制を確立する過程であり、全国諸藩も藩体制を大きく変容させていきました。

本展示は、海防関係や幕末政局への介入過程、戊辰戦争における北越戦線での戦闘、廃藩までの職制改革などについて、主に幕末期の藩主前田斉泰、前田慶寧父子の政治判断に注目しながら加賀藩の動静について紹介するものです。

展示品は、館蔵の古文書のほか、それらから作成したデータ類のパネル、さらには各機関よりご出品いただいた資料からなっています。

本展を開催するにあたり、資料のご出品などご協力いただいた皆さまに心より御礼を申し上げます。

平成二十七年十月

金沢市立玉川図書館

近世史料館

協力者一覧(敬称略)

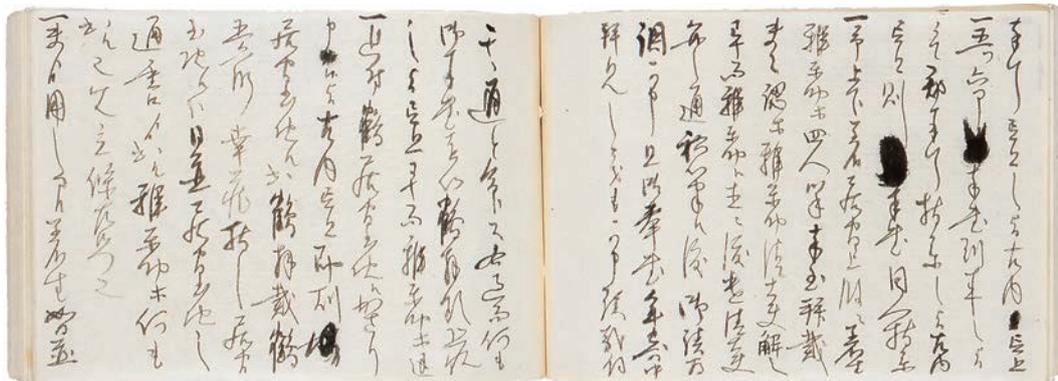
石川県立図書館
石川県立歴史博物館
板橋区立郷土資料館
金沢大学附属図書館
公益財団法人前田育徳会
前田土佐家資料館

凡例

- 本図録は、金沢市立玉川図書館近世史料館が開催する特別展「幕末維新期の加賀藩」に合わせて作成したものです。
- 会期中に展示替えの可能性があり、一部の資料は展示されないことがあります。
- 借用資料の資料名は原則として、所蔵先の名称に拠っています。
- 本図録に掲載されている写真および記事の転載については、当館および資料所蔵者の許可が必要です。

異国船の接近と海防問題

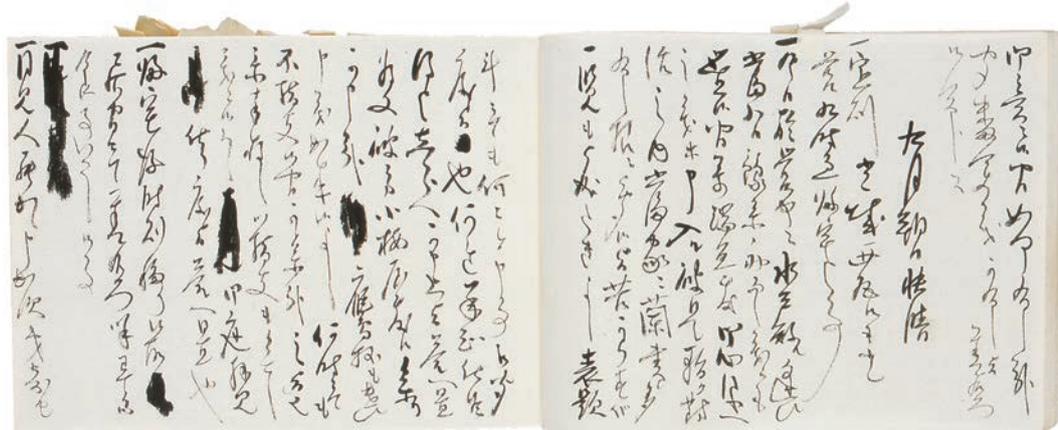
外国船が頻繁に通航するようになると、外国船の取扱方法と海防体制の強化が課題となっていく。加賀藩でも加越能三州沿岸に台場を設置し、訓練場・鑄造場の建設、領内の百姓や町人を動員した銃卒稽古などが実施されており、海防意識は高揚していた。また、板橋の加賀藩下屋敷においても大砲製造が許可され、訓練が実施されていた。



1 温敬公日記

公益財団法人前田育徳会蔵

天保4年(1833)、江戸より奉書が到来し、将軍からの「御懇之上意」と「御鷹之鶴」を藩主前田斉泰(温敬公)は拝領した。



2 温敬公日記

公益財団法人前田育徳会蔵

天保6年、江戸城内において藩主前田斉泰が水戸藩主徳川斉昭と面会した際、前田家には蘭書が多く所蔵されていると聞いており、表題だけでも閲覧したいと依頼され、斉泰は了承している。



3 小銃元込紙薬包式スナイドル銃

板橋区立郷土資料館蔵

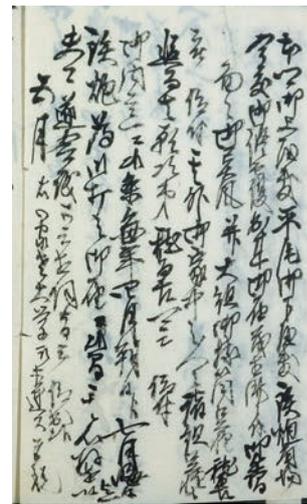


4 小銃先込雷管式ゲベール銃

板橋区立郷土資料館蔵

5 成瀬正敦日記

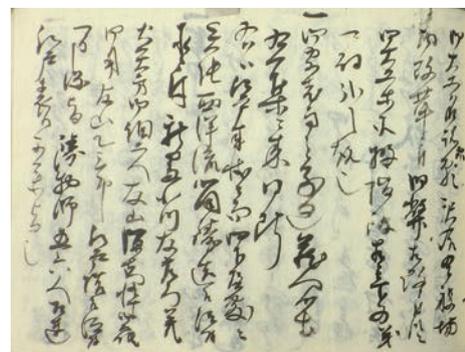
本館蔵



弘化2年(1845)5月、本郷上屋敷および平尾(板橋)下屋敷に角場を設置し、幕府への届出も終わったために稽古を実施することが定められた。

6 御家老方等諸事留

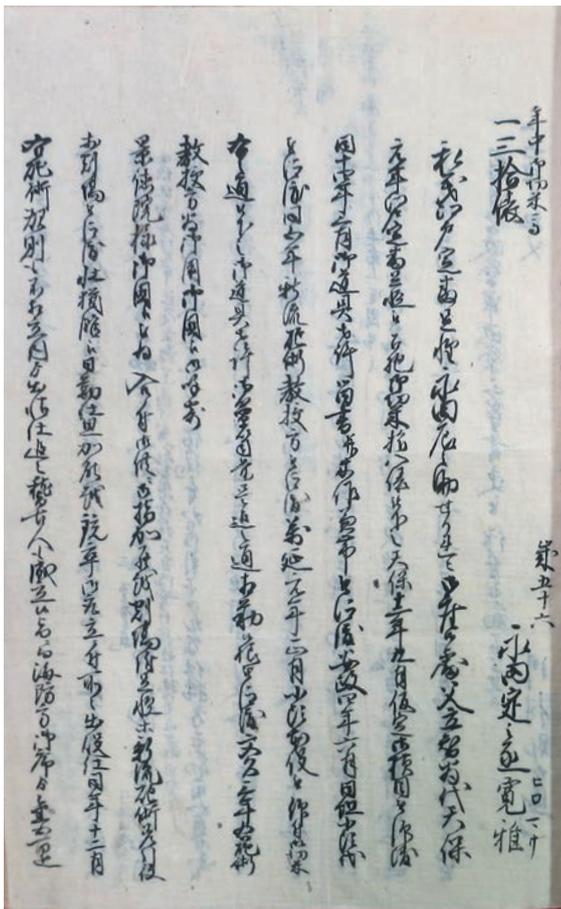
本館蔵



嘉永6年(1853)11月、西洋式筒を製造するため、平尾の下屋敷に火器方担当者および鋳物師を江戸に派遣することになった。

7 永田家由緒帳等諸事控

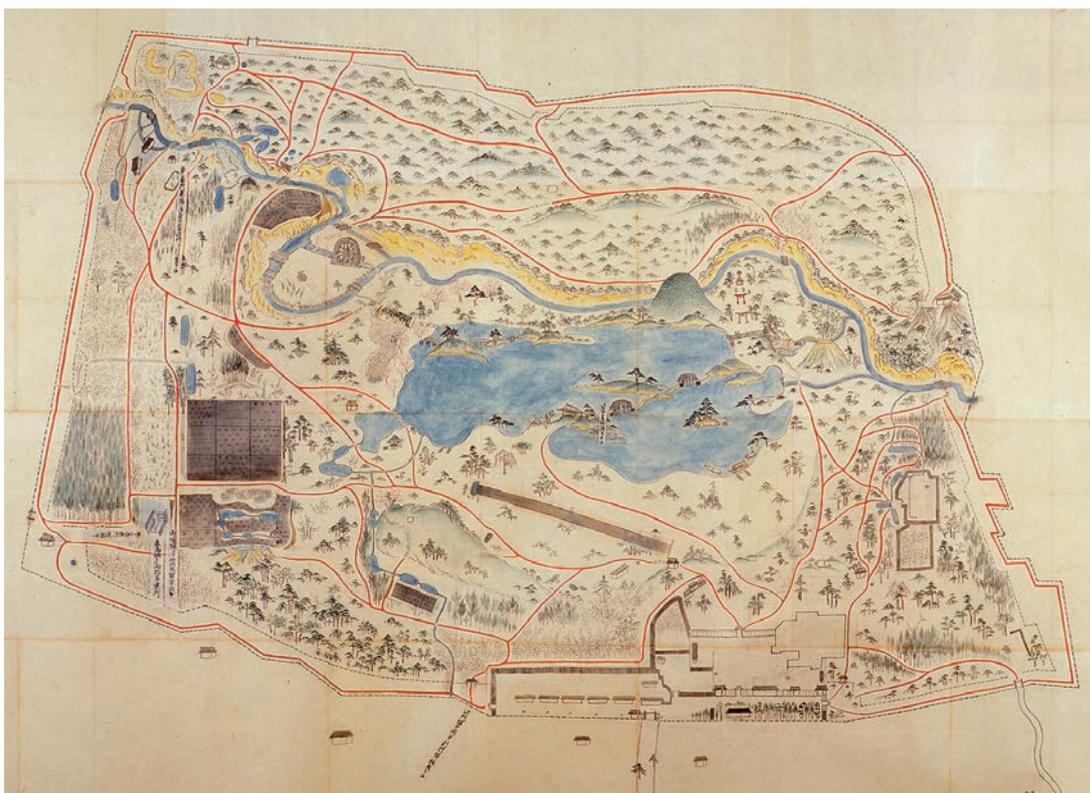
板橋区立郷土資料館蔵



永田定之丞は江戸下屋敷定番足軽として藩に仕えていたが、溶姫御供として金沢に赴くと、新流砲術の知識があることから壮猶館に配属し、各地に向いて銃卒稽古の実施に関わった。その後、溶姫御供として江戸に戻るが、慶応4年(1868)5月に再び金沢に来ると、割場附となって戊辰戦争に参加した。

8 下屋敷御林大綱之絵図

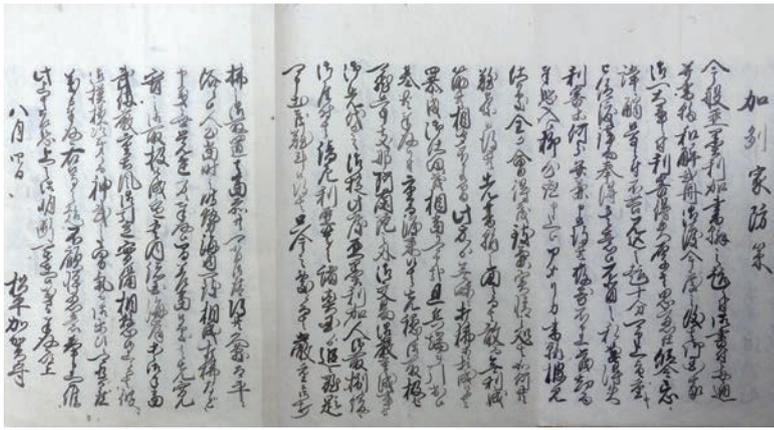
本館蔵



本館蔵



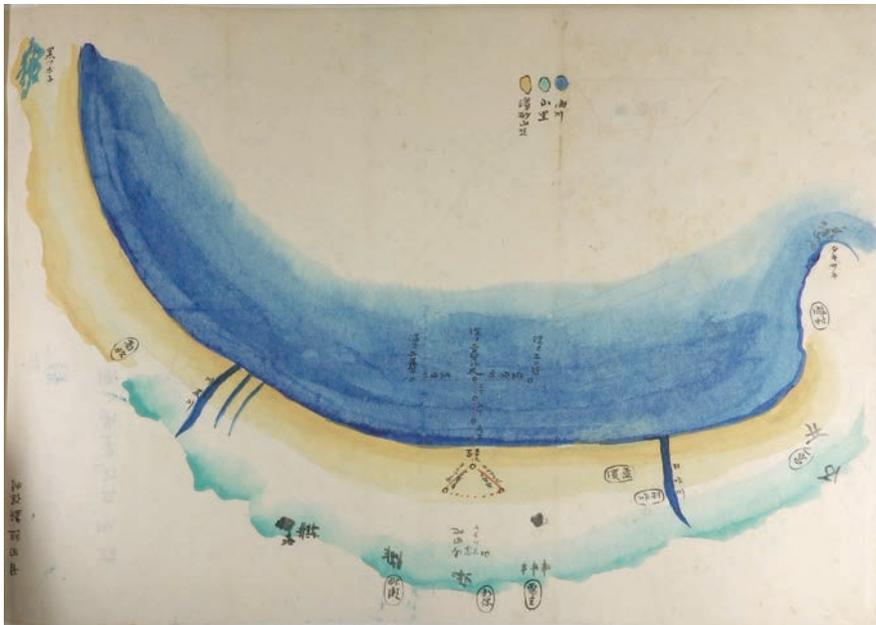
文久2年(1862)、加賀藩は軍艦発機丸を横浜で購入したが、それまで所有していた船とは異なる旗印が使用されている。



10 加州家等防策上書 石川県立図書館蔵
嘉永6年8月、幕府に提出した藩主前田斉泰の海防意見書。打ち払いの処置は当然だが、久しく太平だったために海内一致も困難であることから、まずは寛容な処置で望み、武備充実を図るべきと述べている。

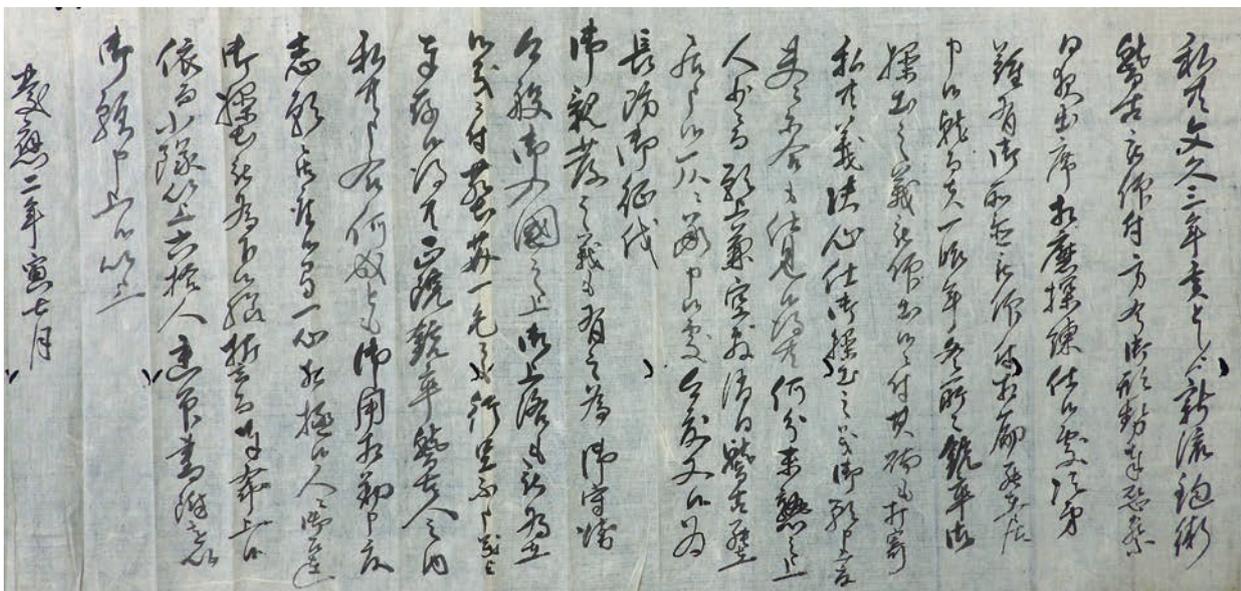
11 台場之図(甘田組新保村)

本館蔵



12 正院銃卒稽古人志願趣旨書写

石川県立歴史博物館蔵



慶応2年7月、珠洲正院の銃卒稽古人が藩に提出した書状で、藩主前田慶寧が上洛する際には是非とも動員してほしいと志願している。

幕末の政局と加賀藩

政局が混乱するなか、文久三年（一八六三）將軍徳川家茂の上洛に藩主前田斉泰が供奉して以降、加賀藩も京都を重視し、藩外交渉を担当する聞番を派遣するとともに、家老が建仁寺に常駐して「御守衛之総裁」となる京都詰体制が成立した。その後、元治元年（一八六四）七月に発生した禁門の変では、在京していた世嗣前田慶寧の退京をめぐって藩内は大きく動揺し、変後に世嗣慶寧が謹慎、藩士数十名が処分される大事件となった。

そして、大政奉還・王政復古といった慶応末期の政治過程においては、藩主となった前田慶寧の下で徳川家重視の政治路線を選択していたが、鳥羽・伏見の戦いが発生すると、朝敵となった徳川家への協力が困難になり前田家の立場も難しくなったことから、新政府に恭順していくこととなった。

14 元治新撰京都細見図



本館蔵

文久3年將軍徳川家茂上洛に供奉する形で藩主前田斉泰が上洛した際、建仁寺を本陣としており、その後も藩主や重臣が上洛した際には建仁寺を宿所とした。また、すでに寛文元年（1661）に三条河原町に藩屋敷を構えていたが、元治元年に世嗣前田慶寧が京都警衛を命ぜられたことから、岡崎の地を新たな屋敷地として願い出て、慶応3年に幕府より正式に了承された。

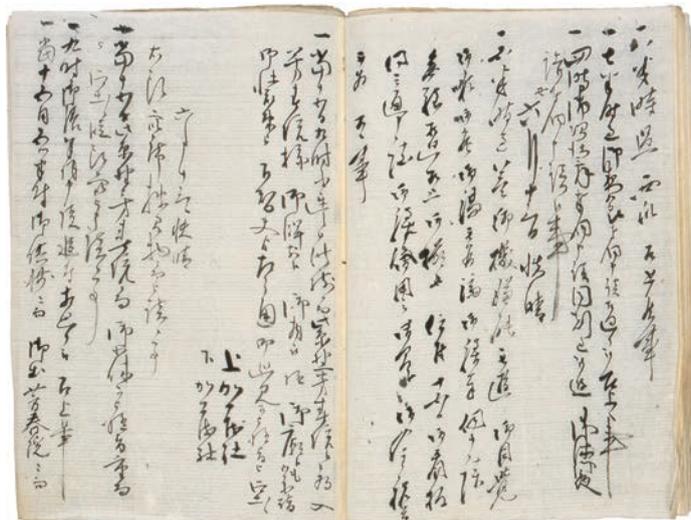
13 前田斉泰写真



本館蔵

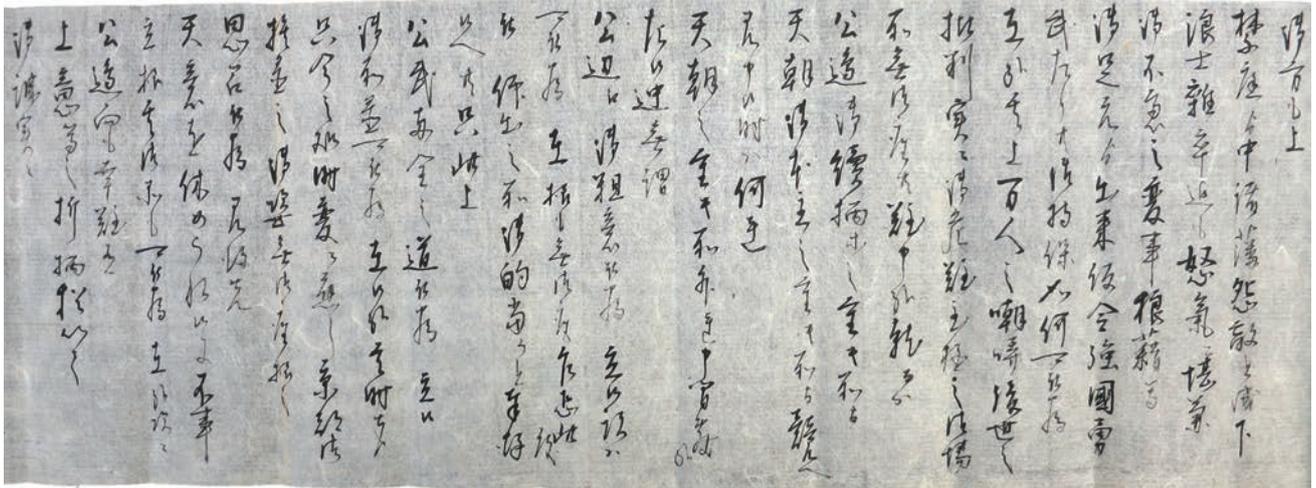
文化8年（1811）生、文政5年（1822）に將軍徳川家斉の偏諱を賜い斉泰と改め、同年家督を相続して加賀守を称した。朱子学を素養に近世的秩序を重んじた藩主で、海防問題や国内の難局への対応に苦心し、慶応2年（1866）に家督を嫡男慶寧に譲り隠居した後も重大事件では藩主慶寧を支えた。明治17年（1884）に死去。

15 御上京中日記



公益財団法人前田育徳会蔵

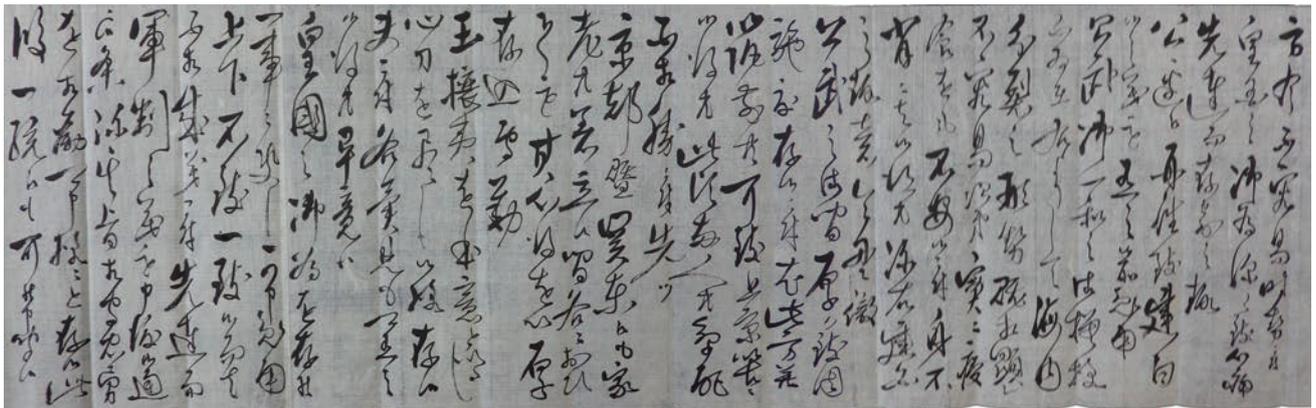
慶応元年6月、上洛中の藩主前田斉泰が紫野芳春院に参詣することが在京藩士に伝えられた。



16 公武之間柄に付存知之趣上申控

前田土佐守家資料館蔵

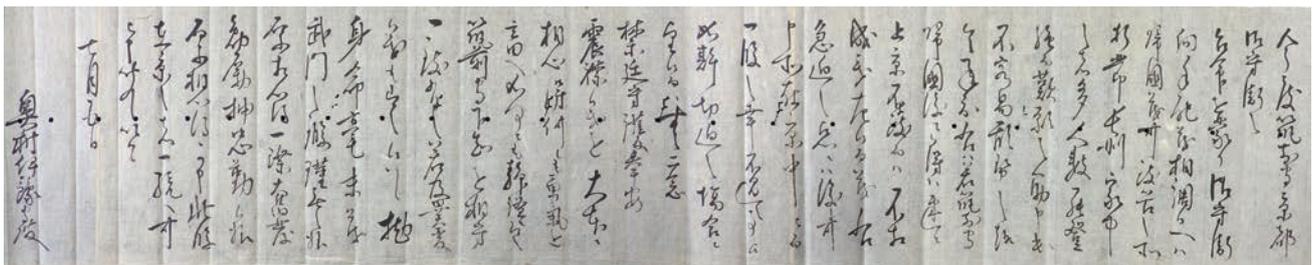
文久2年6月、加賀藩年寄前田直信が藩主前田齊泰に提出した意見書の控。前田家と徳川家は重き続柄であるが、天皇は本主として重き存在であり、もしも朝廷と幕府が争うような状況となれば朝廷を重んじるが、けっして幕府を粗意にしている訳ではないと述べ、何よりも宸襟を安んじることを説いている。朝廷と幕府の関係が難しい状況にあつて、加賀藩がいかなる立場で動くべきかを進言した内容といえる。



17 公武合体等時勢に付御親翰写

石川県立歴史博物館蔵

文久3年7月、藩主前田齊泰が家中に示した親翰の写。公武一和とならず海内分裂の様相を示している状況を憂い、建白書の提出にしたがつて「勤王攘夷」を旨として朝廷・幕府に周旋することを宣言し、京都・江戸に家老を派遣することを伝えている。また、異論があるとおもわれるが「皇国之御為」にも自身の意見に従うようにと述べている。



18 筑前守様京都御守衛被命に付御親翰写

石川県立歴史博物館蔵

元治元年7月、在京の年寄奥村栄通に対して国元の藩主前田齊泰が出した親翰の写。長州の軍勢が京都周辺に展開し不穏状況になっている今、京都守衛の命令をうけ在京としていることをむしろ幸いと捉え、御所を守護して宸襟を安んじ、少しでも武門の瑕瑾とならないように忠勤に励むことを強く求めている。

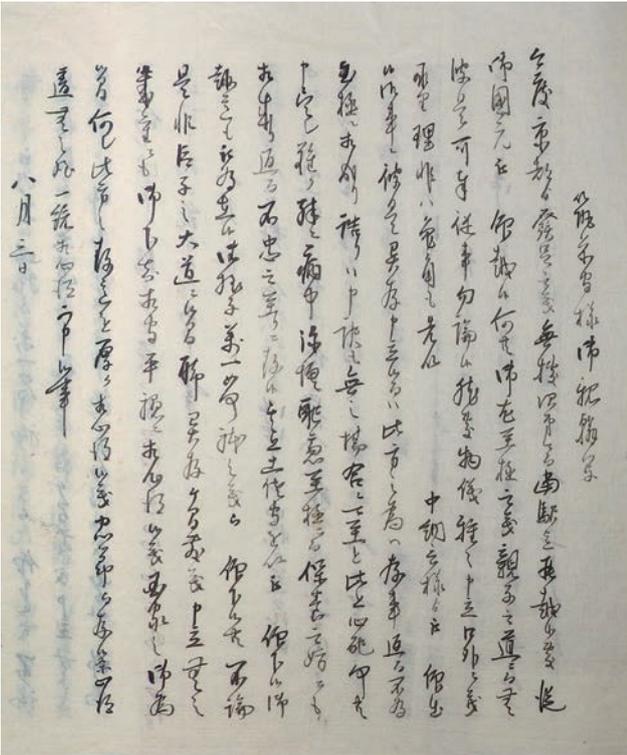
19 前田慶寧公御写真



本館蔵

天保元年(1830)生、父は前田斉泰、母は11代將軍徳川家斉娘の澁。同13年に將軍徳川家慶の偏諱を賜い慶寧と改める。政治周旋を目的として元治元年に上洛するが、禁門の変では世嗣として苦しい政治決断を迫られた。慶応2年に家督を相続して加賀守を称し、大政奉還や王政復古後は徳川家を重視した政治姿勢をとる。明治4年の廃藩置県後に東京へ移住、同7年に死去。

20 前田慶寧退京につき前田斉泰親翰等留



本館蔵

元治元年8月、禁門の変発生後に退京した世嗣前田慶寧が、滞在している近江海津において出した親翰の写。親子の道をもって国元の藩主斉泰の指示に異論なく従うとし、随行の家臣たちにも物議を醸すことなく臣子の大道にて従うように諭している。

21 京都詰中手留

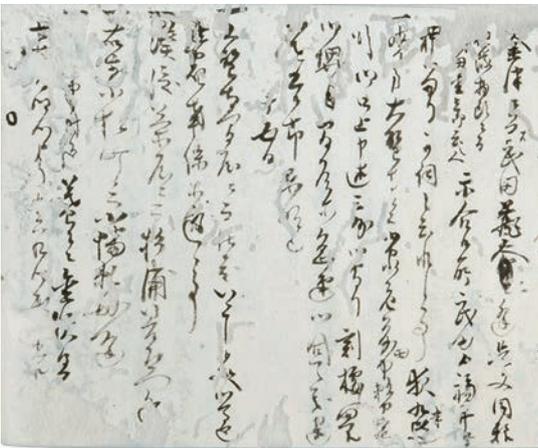


本館蔵

慶応3年12月9日、藩主前田慶寧が京都に到着した同日に王政復古の大号令が出され京都は大きな騒ぎとなった。京都詰家老前田孝錫は、御前で会議を遮る形で市中の警備に向かっている。

22 成瀬日記

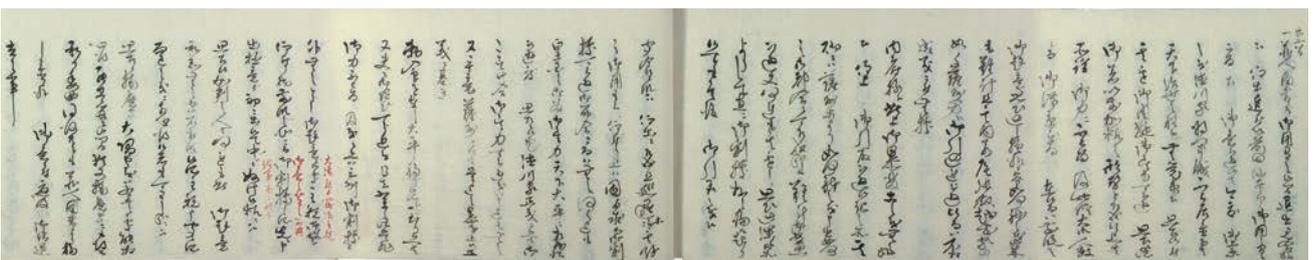
金沢大学附属図書館蔵



慶応3年12月、退京する藩主前田慶寧の使者となった近習成瀬正居は、帰藩前に面会した大聖寺藩の重臣に藩領境や間道を兵で固めるように伝えている。

23 御内々御尋并申上候品等覚

本館蔵



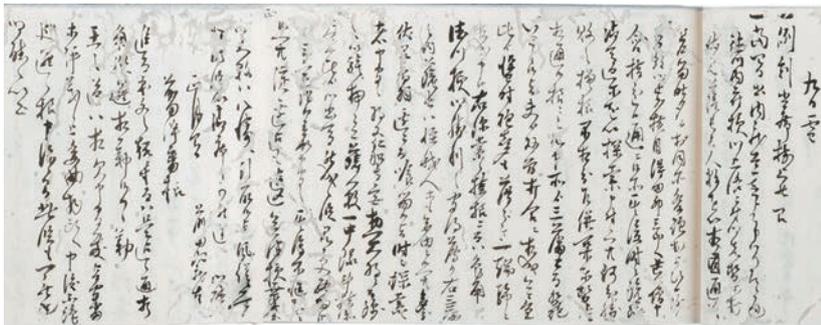
王政復古後に藩主前田慶寧は家老を呼び、天下太平となるよう尽力するが、徳川家が正義であるため助け合い尽力することは当然と主張する一方で、薩摩についても正義に基づいて行動するのであれば従うことも可能と述べている。

転戦する加賀藩

慶応四年（一八六八）正月、鳥羽・伏見の戦い後、徳川家に協力するために派兵した加賀藩であったが、在京藩士の進言もあって兵を引き返して新政府への恭順姿勢を示した。その後、抗戦の態度を強める勢力と官軍が衝突し戊辰戦争が激しくなると、四月には薩摩・長州と共同し北越戦線に派兵することを命じられている。加賀藩は、閏四月末の鯨波での戦いを皮切りに激しい戦闘を繰り返して、七月末の長岡城制圧などに貢献した。その後、越後を北上する部隊と会津に向かう部隊に分かれ、最後の隊が金沢に帰還したのは明治二年（一八六九）二月であった。

24 成瀬日記

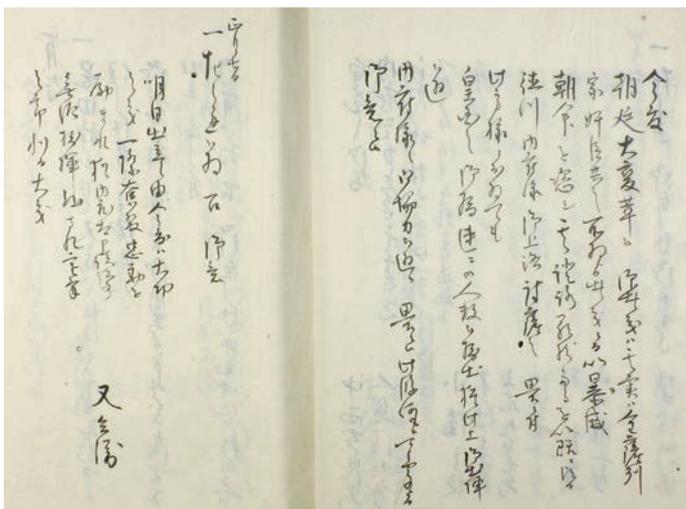
金沢大学附属図書館蔵



慶応4年正月4日付の京都詰家老前田孝錫の書状では、戦闘の様子はよく分からないが徳川方の状況が悪いこと、「錦之御旗」が出されたことが伝えられた。

25 御意之趣書抜

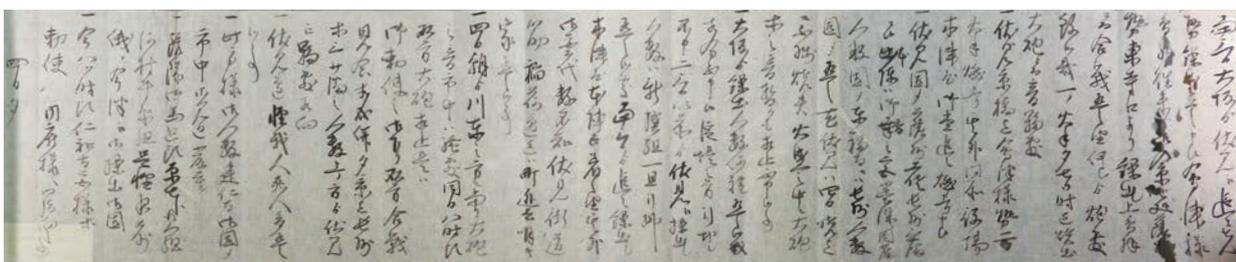
本館蔵



慶応4年正月6日、藩主前田慶寧は京都の情報を踏まえて前藩主前田斉泰、重臣らと会議を行った後、家中に対して徳川慶喜の討薩に呼応して上洛、協力することを宣言している。

26 鳥羽伏見一件書上

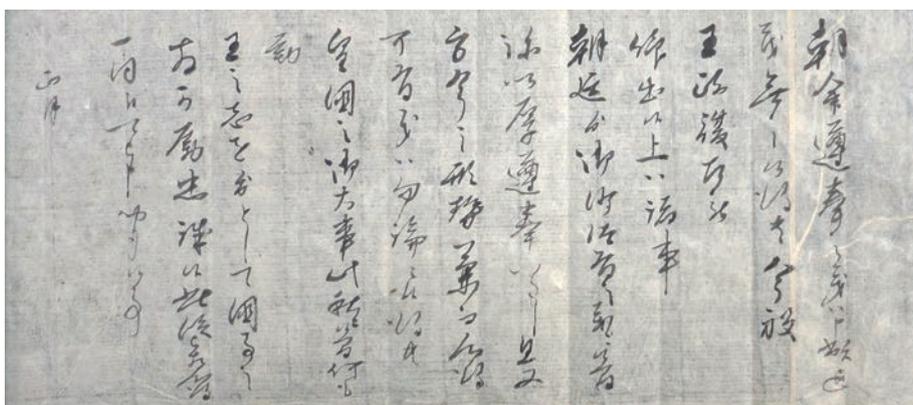
本館蔵



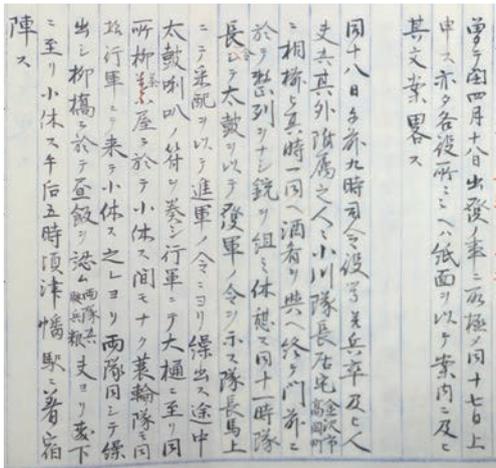
鳥羽・伏見の戦い発生後の京都の状況が記された書状。新撰組など旧幕府方の動きを中心に書かれているが、4日の段階では戦況を十分に把握しきれていない様子が見える。

27 王政復古に付忠誠尽力徹底達状

前田土佐守家資料館蔵



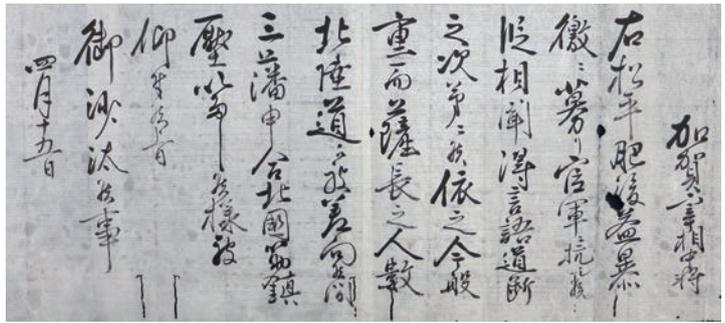
先に徳川家に協力することを宣言した藩主前田慶寧であったが、徳川家が朝敵となったことや前田家の朝廷への忠誠を示すため、これまでとは異なる方針を家中に表明した。



29 北越出師書類抄録

本館蔵

加賀藩から派遣されることが決まった藩士小川仙之助の部隊は、出発当日に隊長宅に集合、酒肴が振る舞われた上で整列し、馬上の小川が采配を振って進軍を開始した。



28 北越戦争出兵沙汰書写

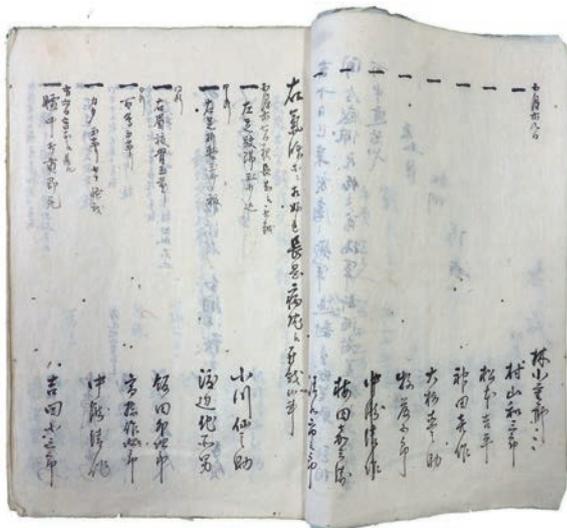
前田土佐守家資料館蔵

慶応4年4月、会津藩が新政府に抵抗していることを理由に、薩摩・長州と共同して北陸道を鎮圧しようとする加賀藩は命じられた。この命令により加賀藩は官軍として部隊を戦線に投入することとなり、藩士小川仙之助・箕輪知大夫らを派遣している。また、同時期には越中境を警備していた藩士齋藤与兵衛以下一大隊も動員されて戦闘を繰り広げている。



30 小川隊旗

石川県立歴史博物館蔵



32 日記

石川県立歴史博物館蔵

小川隊は4月下旬から戊辰戦争に参加し、7月上旬に他の部隊と交代するまで前線で戦闘に参加した。この日記は戦闘等の概略を書き記したもので、隊長の小川が負傷したことも記されている。



31 隊割帳

石川県立歴史博物館蔵

北越戦線で激戦を繰り広げた小川隊の部隊帳で、小隊長の高島全三郎以下、隊士の戦歴が書き留められている。高島は隊長の小川が負傷した後に隊を統率し、帰藩後には新知150石を拝領して馬廻組に列した人物である。

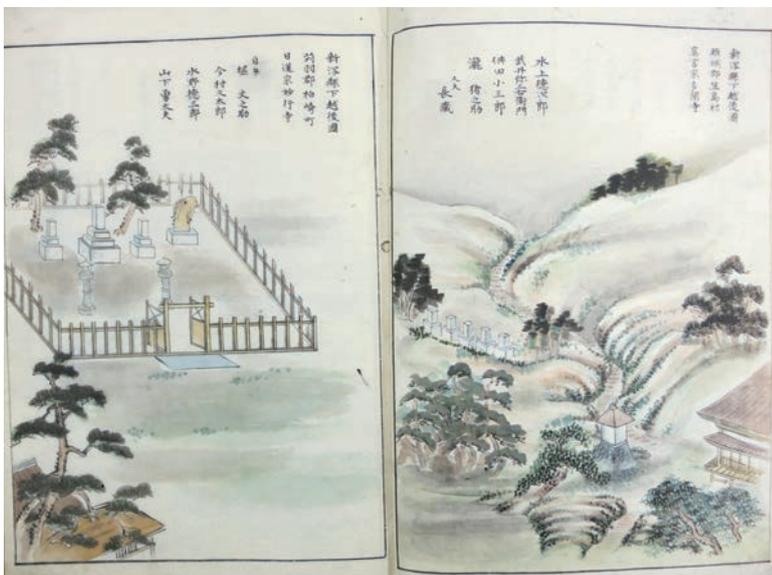


33
五月十六日ヨリ官軍長岡城ヲ攻メ十九日竟ヒ之ヲ陥シイル本藩銃兵小川隊砲兵水上隊及ヒ薩長高田三藩兵戦地之図(加賀藩北越軍事輯録)
本館蔵



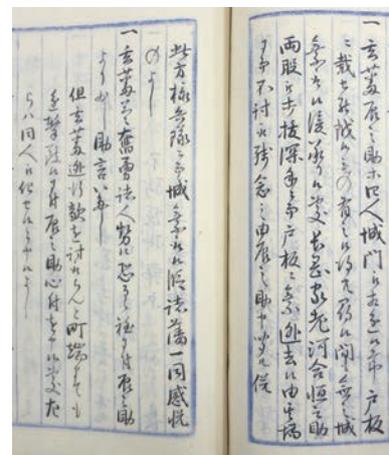
34
七月廿九日官軍大塚長岡ヲ攻メ之ヲ回復ス途中各処戦地之図(加賀藩北越軍事輯録)
本館蔵

北越戦線において長岡藩と官軍は激突し、5月に官軍は長岡城を制圧したが、その後7月25日の襲撃によって奪還されたことから、29日に再び攻撃を仕掛けて長岡城を制圧した。



36
北越戦死者墳墓箇所絵図
本館蔵

北越戦線において戦死した者たちは現地で埋葬されており、その地を描いた絵図。越後国頸城郡笠島村真言宗多聞寺、同国荊羽郡柏崎日蓮宗妙行寺など、18ヶ所が描かれている。



35
北越出師書類抄録
本館蔵

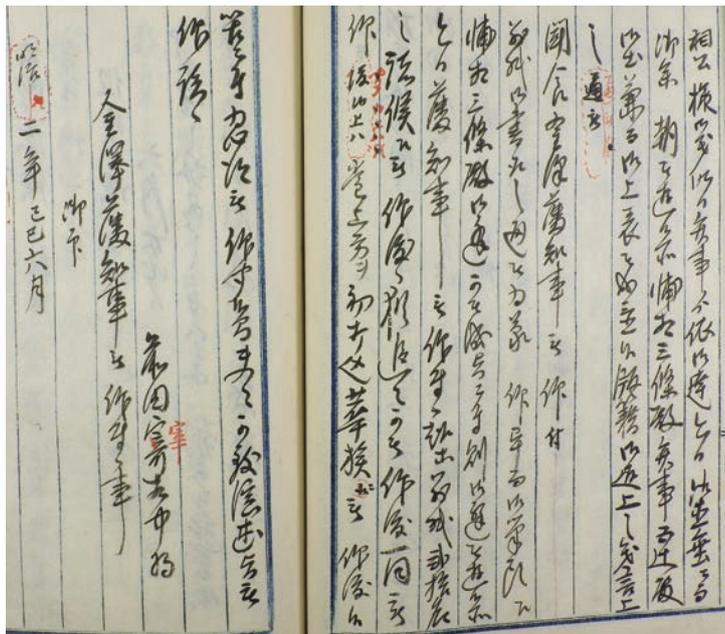
長岡城再攻撃では、加賀藩家老津田正邦隊が激しい銃撃戦を行った。その後城内に押し入った際、戸板に乗せられ退却する人物を見かけたが、それが長岡藩家老河井継之助であったとされる。

明治初年の加賀藩

明治初年、全国諸藩は新政府の命令によって藩体制を大きく改編させることとなる。加賀藩においても明治元年（一八六八）の藩治職制、同二年の諸務変革令および職員令、同三年の藩制に随時対応していくことで藩体制を変容していった。版籍奉還によって金沢藩が成立すると、藩主前田慶寧も知藩事に任命され、重臣層も年寄・家老の体制から執政・参政、そして大参事・少参事へと移行していった。そして、同四年の廃藩置県によって廃藩となり、知藩事前田慶寧も免官となって藩は終焉を迎えた。

37 維新以来御達等

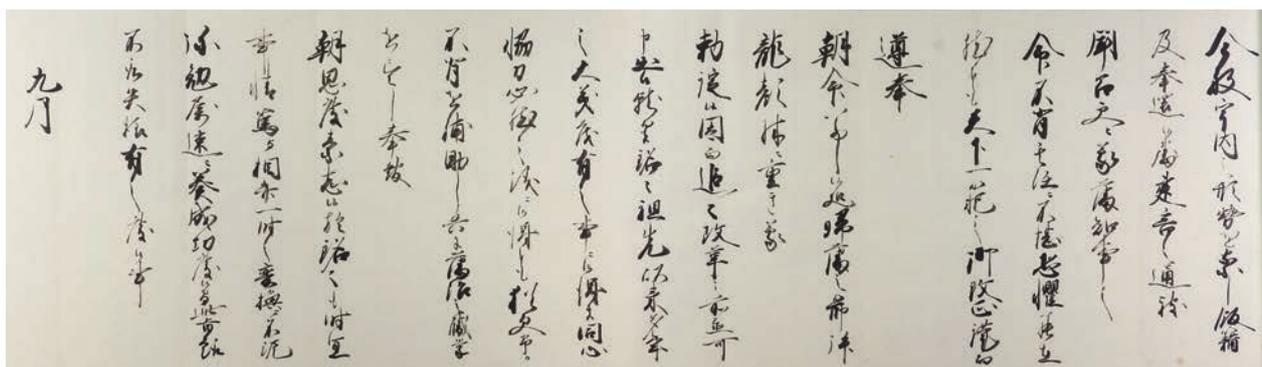
本館蔵



明治2年6月、以前に奉還を建白していた藩主前田慶寧に対して版籍奉還が認められ、慶寧は金沢藩知事に任命された。

38 触留

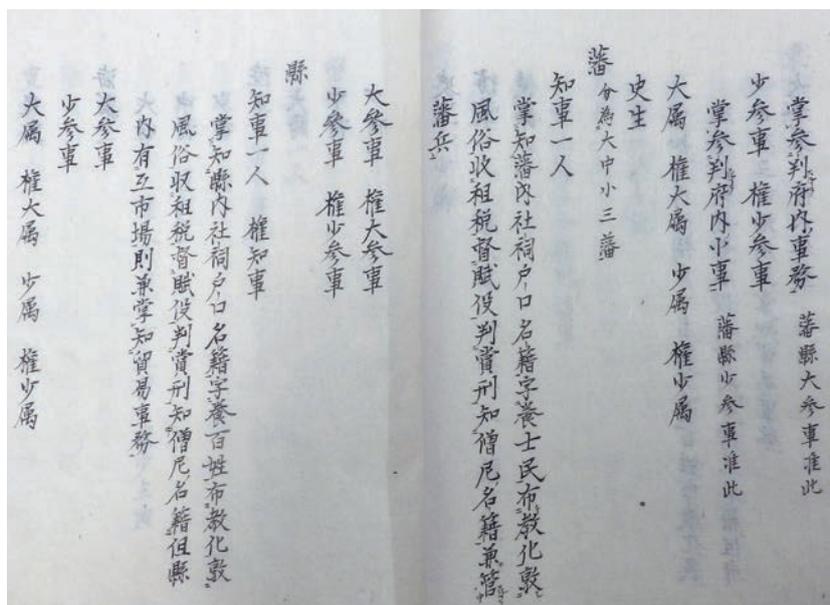
本館蔵



明治2年9月、知藩事前田慶寧が家中に示した親翰で、天皇に拝謁した際に重き勅諭を拝領したため、同心協力してほしいと述べている。

39 明治職員令并藩治職制

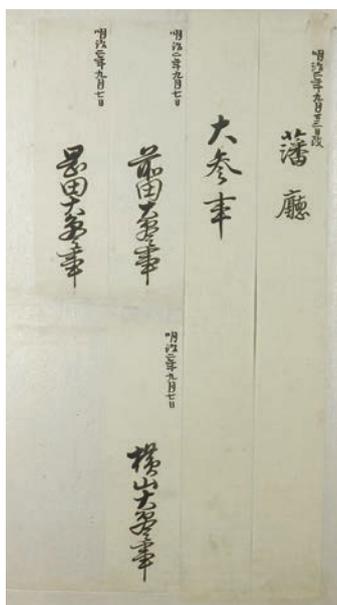
石川県立図書館蔵

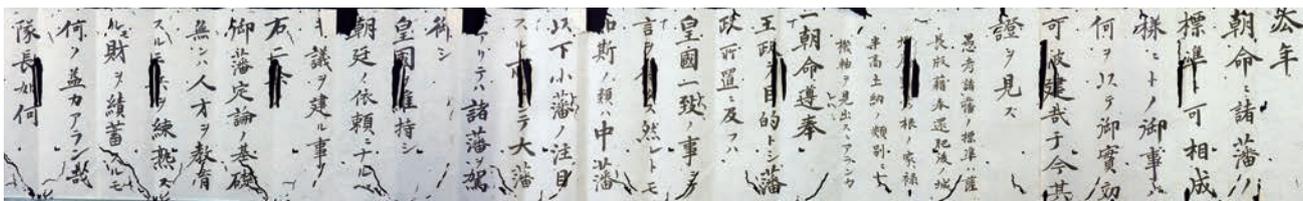


明治2年6月、新政府は職員令を出して行政機構の大幅な変更を企図し、加賀藩では9月に職員令に基づいた改編を実施した。

40 役懸帳

本館蔵

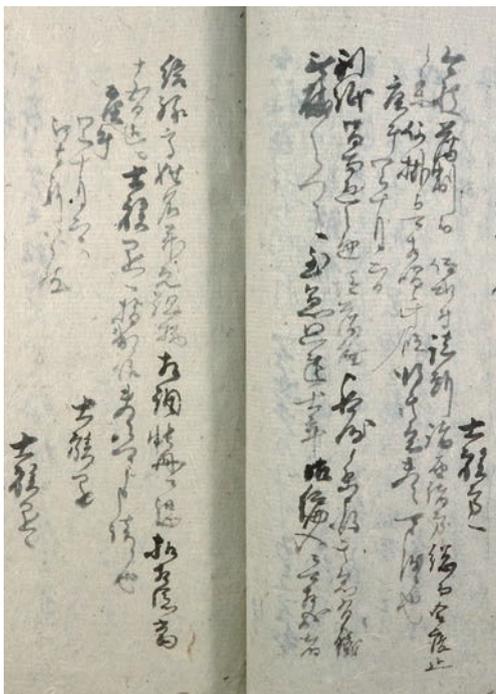




47 金沢藩の方針に付諫言状

石川県立歴史博物館蔵

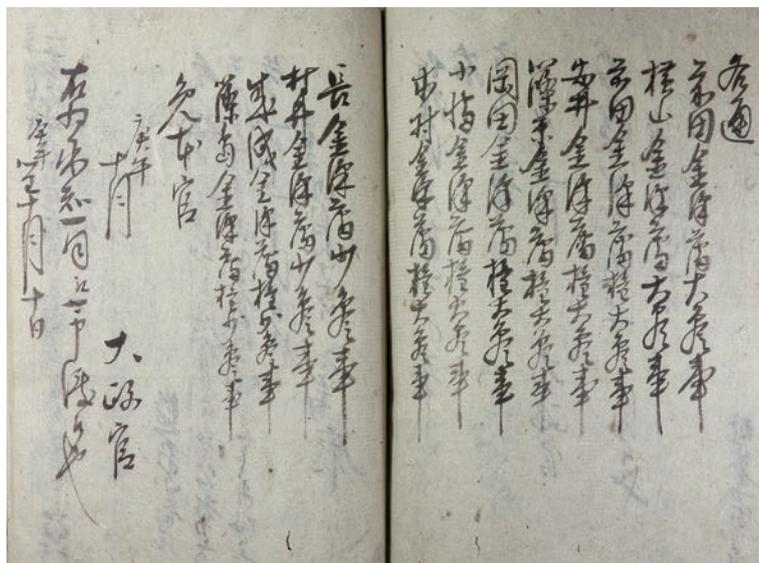
明治3年、東遊士なる人物が当時部隊長だった小川仙之助に宛てた金沢藩政に対する諫言状。前年に朝廷より拝命した「諸藩ノ標準」となるためには、ただ王政を目的として藩政を行うのは中藩・小藩であるとして、大藩としての朝命遵奉のあり方を述べ、藩政を批判している。ここでは、「諸藩ノ標準」として、薩長による版籍奉還や彦根の家禄半高上納などが取り上げられている。



49 触留

本館蔵

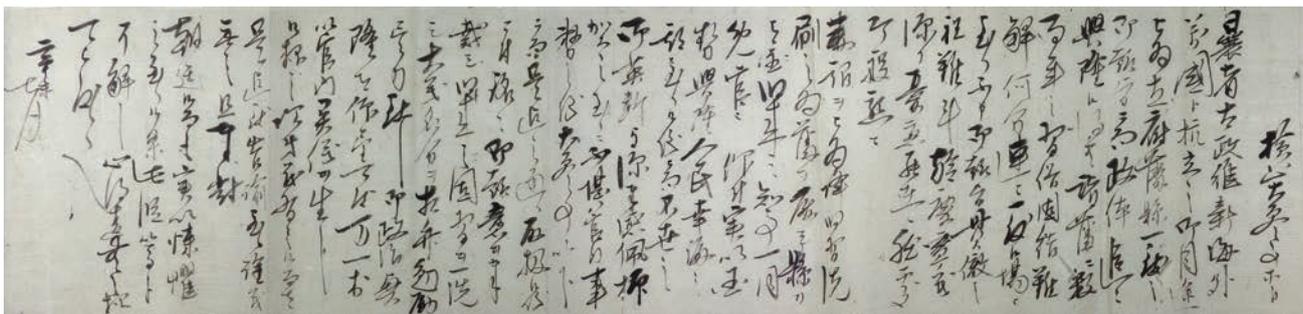
明治3年閏10月、土族掛より給禄高・姓名・先祖等を帳冊に認めて提出するように命じられたが、これが「先祖由緒并一類附帳」として藩に保管された。



48 触留

本館蔵

明治3年閏10月、先の9月に出された太政官の通達を受けて、大参事前田直信をはじめとした正権の少参事が一斉に免官となった。後任には陸原惟厚、北川克由といった低禄の実務層から多く登用されており、藩上層部は一新されることとなった(その後、横山政和・前田孝錫・篠原一貞は復職)。



50 廃藩置県詔勅并前藩知事告諭

本館蔵

明治4年7月に廃藩置県が断行され、前田慶寧は知藩事を免官となった。その際に大参事横山政和に対して、英断の趣意を奉戴して旧来の因習を一洗させるように勉勵尽力するとともに、管内では異議を生じさせることのないように申し諭している。



51 金府大絵図

本館蔵

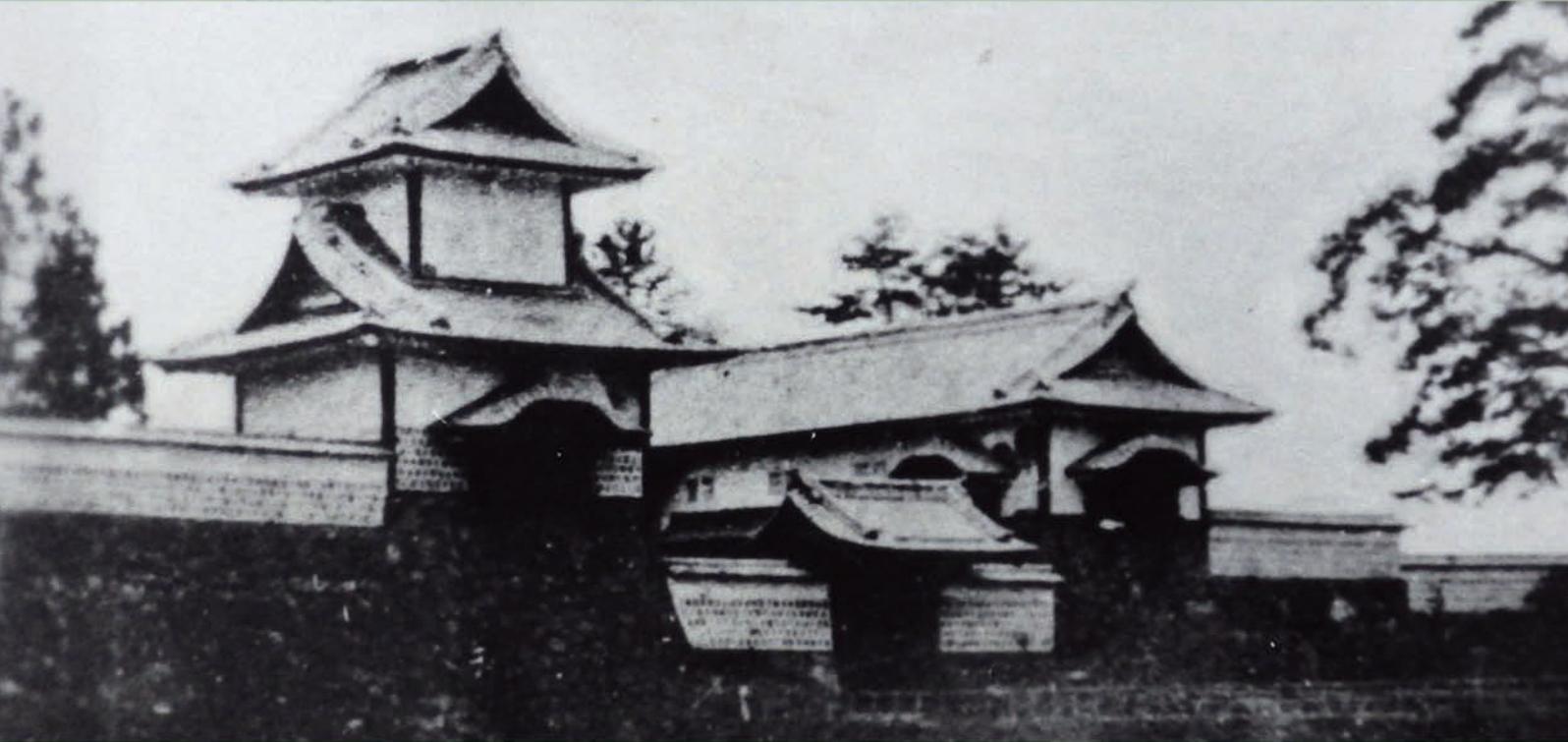
近世後期の金沢城下図で、藩士の名や寺社等が書き記されている。また、金沢城も正門とされる河北御門が記されているなど、堀や惣構の様相がわかる。



52 金沢町絵図

本館蔵

明治初年の金沢城下図で、上の「金府大絵図」と比較すると変化が読み取れる。本多家上屋敷が藩主家住居、長家上屋敷が藩庁など、重臣の上屋敷が藩有となり藩の施設が置かれている。



平成27年度特別展

幕末維新期の加賀藩

会 期 平成27年10月8日(木)～11月23日(月・祝)
編集・発行 金沢市立玉川図書館近世史料館
印 刷 田中昭文堂印刷株式会社

表 紙：「前田斉泰写真」「前田慶寧公御写真」「加越能三箇国絵図」
裏表紙：「石川門(金沢城門等写真)」